

終章にかえて

私の表現は、常に自分自身が感じた疑問から始まっている。例えばそれは「やきもの」と「うつわ」の神秘的ともいえる密接な関係性に対してであり、自身の想像を遥かに上回る粘土素材の乾燥、焼成で起こる変形現象であり、格子構造体に浮かび上がった光と影の美しく不思議な階調の変化であった。

しかし、私はそれらに正しい解答を提示することや、作品をその証明の対象にしようとしているわけではない。疑問は、私にとっての大切なリアリティとして精神の奥底で眠る感性を覚醒させるものであり、それは新たな発見と豊かな想像力を生みだし、ときに自身の想定を越えた未知数の可能性を導き出す契機となりえる。そして表現とは、そのような可能性を自身の感性と理性によって結晶化させた未来への投射として、次なる疑問を開くものでありたいと考えている。

光が作品に内在する空間の中に引き込まれ、磁器素材の透光性と反応することで表現の具体的な要素になりえるということは、私自身が自作から学び取った発見であり、この発見が本研究の可能性の扉を開く手がかりになったといえる。そこで問われた本質的な空間の是非は、今後、私を次なる表現の地平へ押し進める新たな原動力になっていくだろう。

私はまだその僅かな一歩を踏み出したに過ぎないが、造形表現が概念的な思考実験で終わることなく、「やきもの」を通して土、水、火、光…といった自然の力を自身の表現によって高く昇華させ、人間の感覚に直接訴えかける働きを託すものとして現代の社会に投げかけていきたい。

すべての空間は何かしらの容器であり、何かしらに満たされることで存在し得る。それは「一枚の皿の上」にも、「無限に広がる宇宙空間」にも同じ原理で存在しているといえるが、やきもの表現がこれからの展開においても人々の開かれた感覚を満たし、無限の体験へいざなうものであると、私は信じている。

2005年11月10日